

平成26年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT26033 こどものいのちと対話しよう!—世界の子どもたちの生活と医療



開催日： 平成26年9月6日(土)
実施機関： 札幌医科大学
(実施場所) (利尻富士町役場総合交流促進施設 りぷら)
実施代表者： 道信 良子
(所属・職名) (札幌医科大学・准教授)
受講生： 16名
関連 URL： <http://web.sapmed.ac.jp/ip/new>

【実施内容】

- 受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点
(1) 応募用チラシとポスターを作成し、プログラムの意図を視覚的に伝えるためのデザインを考え、その絵柄を当日の配布資料(図1参照)、会場案内のポスター、報告書資料、記念写真にも活用した。
(2) 科研費の成果説明では、講義による説明は最小限に留め、「波照間すごろく」(図2参照)を作成し、利尻島の子どもたちが、両島の生活や文化の違いについて、すごろくを楽しみながら学べるよう工夫した。体験型ワークショップでは、「身体」と「文化」の二つのプログラムにわけ、少人数で講師と深くかわりながら学べるよう配慮した。また、会場を最大限活用し、複数の教室や和室も使った。和室では、常時寝ている状態を再現し、どの部分に枕やタオルを添えると身体が楽になるかを考えた。
(3) この他に、子どもの「文化」と「身体」の多様性について、受講生が楽しく学べるよう、次のような配慮をした。「文化」のプログラムでは、南の島のヴァヌアツとアフリカのザンビアの子どもたちの生活を、遊びやダンスや会話で体験した。「身体」のプログラムでは、車いすを使って、身体が不自由な子どもたちの介助を体験し、ネパールの子育て体験では、キューピー人形の他に、看護実習用の新生児モデル人形を使った。ネパールの新生児の衣装も使用した。
(4) クッキータイムでは、受講生全員が発表し、二つのプログラムでの学びを保護者、地域の方々、小学校教諭、プログラム講師と共有した。そして、自分たちの生活と世界の子どもたちの生活の同じところや違いについて話し合った。
(5) 体験型ワークショップで使用したキューピー人形、ネパールの新生児の衣装、波照間すごろくは地元の小学校に寄付し、プログラムに参加できなかった児童も、体験を共有できるように配慮した。

2. 当日のスケジュール

- 12:30-13:00 受付(会場(りぷら)大ホール集合)
13:00-13:10 開講式(あいさつ、オリエンテーション)、科学研究費の説明
13:10-13:30 アイスブレイク「利尻島と波照間島の子どもの生活」
13:40-14:40 「文化」および「身体」のプログラム(体験型ワークショップ)
15:00-15:20 クッキータイム(児童・保護者・教員と研究者との交流)
15:20-15:30 質疑応答 修了式(アンケート記入、未来博士号の授与、記念撮影)
15:30 終了・解散

3. 実施の様子

- (1) オリエンテーション 配布用資料を作成し、小学生児童にわかりやすく説明した。



図1 配布資料

(2) アイスブレイク 波照間すごろくを作成し、利尻島との違いについて学んだ。



図2 波照間すごろく



「波照間すごろく」で両島のちがいを学ぶ。

(3) 身体のプログラム

車いすの操作と寝たきりの状態を体験した。



車いすの操作の説明を受ける。



常時寝ている状態と、その介助を体験する。

ネパールの子育てでは、ネパールの赤ちゃんのオイルマッサージや衣装を着せ替える体験をした。



(4) 文化のプログラム

ザンビア共和国の子どもの生活について母子保健の活動のようすも含めて学んだ。



ヴァヌアツの子どもの生活と遊びについて学んだ。



(5) クッキータイムで2つのプログラムの学びを全員でふり返った。



4. 事務局との協力体制

附属産学・地域連携センター産学・地域連携係が、委託費の管理、提出書類等の確認・修正及び事務手続きに係る学内調整をはじめ、日本学術振興会への事務手続き及び実施代表者等との連絡調整を担当した。

5. 広報活動

利尻町と利尻富士町の教育委員会から、各小学校に本事業の実施を通知した。各小学校から、児童と保護者にチラシ(兼応募用紙)を配布して参加者を募った。また、大学の広報担当と協力し、札幌医科大学のホームページに案内を掲載し、プログラムへの参加を呼びかけるとともに、実施後は活動状況を掲載するなど、本事業の趣旨及び内容について、広くPRした。

6. 安全配慮

アイスブレイクは実施代表者(1名)と実施協力者である外部講師(1名)が担当し、ワークショップは実施分担者(1名)と実施協力者の外部講師(3名)が分かれて担当した。安全性の配慮のために、教育委員会職員(1名)と小学校関係者(養護教諭1名)が、付いた。ワークショップ時に、実施代表者は各々のグループを見て回り、安全に十分配慮した。利尻町と利尻富士町の教育委員会の協力を得て、非常時には関係者が協力して対応にあたる体制を整えた。不慮の事故に備えて参加者全員に傷害保険をかけた。また、募集時に、島外からの参加者には、自宅と会場との往復途中については、受講生本人および保護者の責任のもとに行動していただくことを周知した。島内の児童には、別途、応募用紙を作成し、必ず保護者の同意を得て、参加するよう、募集要項に記入した。自宅と会場との往復途中については、参加者本人と保護者の責任のもとに行動するよう、教育委員会を通じて案内し、希望する参加者及び保護者には、スクールバスを手配し、教育委員会職員および児童が参加する小学校の教員(養護教諭含む)が引率した。利尻島国保中央病院に、プログラムの開催について、事前に連絡し、事故やけがの対応に備えた。

7. 今後の発展性、課題

本事業は、大学ではなく、子どもたちの生活の場で、研究成果を還元するという意義深いものとなった。実施においては、札幌医科大学と交流の深い、利尻島の関係機関からの協力が得られたことが成功につながった。他方、島の子どもたちは、都市の子どもたちに比べて、日常的に文化的な事業にふれあう機会が少なく、本事業への関心を高めるのに苦労した。また、科研費の研究分担者が本学に所属していないことや、他の研究機関の研究者が講師として参加したことにより、講師全員に旅費を支給することができなかった。分担研究者を含め、本事業における講師の位置づけがあいまいになった。本事業への参加者は募集人数を下回ったが、利尻島にある4つの小学校のうち、3校の校長・教頭・養護教諭などが見学し、保護者や地域の人々も参加するなど、地域に科研費の成果を広く伝えることができた。

【実施分担者】

樋室 伸顕 公衆衛生学講座・助教

【実施協力者】 4名

【事務担当者】 札幌医科大学附属産学・地域連携センター 副センター長 高橋 朋江